

凡 例

1. 本書で用いている補瀉法は、明代・陳会の著書『神応經』の捻転補瀉法を遵守している。具体的な方法は、補法はまず、施術者が判断した目的の深さまで刺入し、鍼感が生じたら連続して3～5分間、あるいは5～10分間捻転補法を施した後に抜鍼する。補法では置鍼を行わない。瀉法は、施術者が判断した目的の深さまで刺入し、鍼感が生じたら置鍼する。置鍼の時間は、一般的に20～30分間とする。置鍼の間、5～10分間ごとに0.5～1分間（または2～3分）捻転瀉法を施す。このようにすると、置鍼の間に2～4回捻転瀉法を施すことになる。最後の捻転瀉法を施した後は3～5分間置鍼をし、鍼感が消失してから抜鍼する。まず瀉法を行ってその後に補法（先瀉後補法）を施す場合は、鍼感が生じてから1～2分間捻転瀉法を施し、10～15分間置鍼する。その後、連続して3～5分間捻転補法を施し、すぐに抜鍼する。捻転補瀉の時間の長さ・角度・頻度は、具体的な病状や患者の感受性によって決定する。一般的に、患部取穴の場合は、捻転補法・捻転瀉法はともに少なくしたほうがよい。循經取穴の場合は、捻転補法・捻転瀉法とともに多くしたほうがよい。弁証取穴の場合は、捻転補法・捻転瀉法はさらに多くしたほうがよい。補と瀉の量の対比では、捻転補法の時間は長いほうがよく、量は軽いほうがよい。捻転瀉法の時間は短いほうがよく、量は強いほうがよい。

本文中の（補）と（瀉）は、刺鍼の補法と瀉法を意味する。また（灸補）と（灸瀉）は、施灸の補法と瀉法のことである。これらの（ ）付きの文字および（点刺出血）（透天涼）などの（ ）付きの文字は、その前に列記された複数の経穴名の全部にかかり、それらの経穴に対して同じ手法を施すことを示している。

2. 本書で使用している「焼山火」と「透天涼」の手法は、明代・除鳳が『鍼灸大全』金鍼賦で述べているような複雑なものではない。本書の焼山火の手法は、施術者が判断した目的の深さまで刺入し、鍼感が生じたら拇指と示指の2指を補の方向に捻転し、その後鍼柄をきつく捻り（局所の肌肉が緊張するようにして、鍼が深く入るのを防ぐ）、下に向けて適度に按圧をかけ、徐々に熱感を生じさせるというものである。透天涼の手法は、施術者が判断した目的の深さまで刺入し、鍼感が生じたら拇指と示指の2指を瀉の方向に捻転し、その後鍼柄をきつく捻り（局所の肌肉が緊張するようにして、鍼が抜けるのを防ぐ）、上に向けて適度に提鍼し、徐々に涼感を生じさせるというものである。この操作方法は、比較的簡単で把握しやすい。

3. 本文中に「補法を用い焼山火を併用する」あるいは（補、焼山火）とある場合は、捻転補瀉法の補法を行い、その後に焼山火を併用するということであり、これにより温補の作用を得ることができる。「瀉法を用い透天涼を併用する」あるいは（瀉、透天涼）とある場合は、捻転補瀉法の瀉法を行い、その後に透天涼を併用するということであり、これにより熱邪を清

散させる作用を得ることができる。

4. 『常用腧穴臨床発揮』(日本語版『中医鍼灸 臨床經穴学』), 『鍼灸臨床弁証論治』(日本語版『中医鍼灸 臨床発揮』)の両書で論じている, 経穴の配穴後の効能・協同作用および某方剤に相当あるいは類似する効果が, 本書で述べている内容と一致しない場合は, 本書を基準とする。

5. 本書の鍼灸処方が中薬の方剤に相当するというのは, 方剤の総合的な効果に相当する, または類似しているということであり, 単味の薬材の分析と各経穴の対応関係を指すものではない。

6. 【臨床応用】に示してある病および証名には, 検索しやすいように【主治病証】において下線を付してある。

7. 【歌括】のなかの主治病・証は, 【主治病証】のうち代表的な病証を抜粋したものである。

8. われわれが 1948 年以前に使用していた鍼は自家製鍼であり, 現在の 25・24 号の毫鍼に相当する。1949 年以降は, 一般的に市販されている 26 号の毫鍼を使用しており, ここ数年は 28 号の毫鍼を使用することもある。